第98号
1985年7月25日

内　容

性と妖怪……1～2
第132回大学共同セミナー……2～4
法人ニュース……5
寄付金報告……5
千人会……6～7
新事務組織の発足……6
業務通信……7～8
わたしたちの合宿……9
利用状況……8～10

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発　行
財団法人 大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木（〒192-03）
電　話　0426-76-8511～3
振替口座　東京5-74590番
編　集
大学セミナー・ハウス
企画室
編集人　中川秀恭
発行人　西田亀久夫
製作　中央公論事業出版

第132回大学共同セミナーシンポジウムから

性と妖怪

筑波大学歴史・人類学系教授
宮田登

性や妖怪は、一般に好事家的な研究の対象と見なされ、歴史学や民俗学の学問研究の枠から排除されがちでしたが、ここでは「歴史学と民俗学の接点」という視角からこの問題を捉え直してみたいと思います。

性の問題を突き詰めてゆくと、「産む性」としての女性の問題がクローズ・アップされてきます。女性は男にはない子どもを産む能力を持ち、産まれてきた子どもを育ててゆく立場にあります。この「産む性」としての女性の性が一つの秩序を形づくり、子どもを産むための日常的な性の営みが、安定した世界を構成している時、われわれは安らぎのある時間と空間に住むことができます。こうした秩序は、人間の成長と植物の成長をオーバーラップさせ、稲作の豊穣を願う日本の伝統的な農村社会の中から作られてきた文化的なパターンであり、従来も伝統的に「産む性」は、庶民の日常生活の軸となってきました。

ところが、この秩序が破られ、「産む性」が破壊された時どうなるか。戦争が起って子どもが産めないとか、出産の直前の不慮の災難などによって産む性が抹殺されたような場合です。現代の流行神になっている水子（みずこ）の霊の発生やそれ以前の間引きの問題などはその好例でしょう。特に妊婦の死は異常な死として扱われ、民俗学的には「流れ灌頂」のような呪法がうまれ、またその葬られ方も普通の死者とは異なっています。そこには、二つの生命が一度に抹殺されることに対する生きている人間の畏怖の感情が表われているのです。

女性の妖怪は、ノーマルな日常的な性から逸脱し、「産む性」が平衡を失ったために生じた異常な性や力が怨念と結びついて、一つの文化の形として表現された時に現象化してくると考えられます。二、三の例を挙げてみましょう。日本各地に普遍的に広がっている信仰の一つにウブメ（産女）の伝承があります。これは妊婦の死にまつわる話で、死んだ赤ん坊をもう一度この世に戻そうとする母親が甦ってきて、通りがかりの人に助けを求める筋です。ウブメは、坂や辻や橋のたもとに出てきて通行人に赤ん坊を預ける。預った男は、そのまま待ちぼうけを食わされているうちに、赤子が段々重くなってくる。どうしようもなくなって思わず「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えた瞬間に再びウブメが現われてきて、「お蔭でわが子がこの世に戻ることができた。お礼に世にもまれな力を与えましょう」と言って去ってゆく。翌朝、男が顔を洗って手拭いを絞ったら真二つに割れた。驚いてまた絞ると四つに切れた。ここで初めて男はウブメから異常な力を授けられたことに気づき、やがて大力士となって出世したという伝承です。

おそらく、これは出産に伴うエネルギーが凝集されて、怪力に置き換えられ、妊婦から男に受け渡されたものと考えられます。出産のための異常な力が、この世にきちんと発現されないままで、歪められた形で現われてくると、ウブメのような妖怪として表現されてくるわけです。

これとよく似た話に、西日本、特に九州の漁村地帯に出現する濡れ女、あるいは磯女という妖怪がいます。これは海辺の渚に出現し、通りがかりの男に襲いかかり、血を全部吸い取ってしまう恐ろしい女です。これには、出産の途中で無念の死を遂げた女性が、出産に伴う大量出血で失った血を、逆に血をすることによって取り戻そうとする吸血鬼のイメージが託されています。この妖怪は鼓膜を突き破るようなものすごい絶叫音と共に出現するとも言われています。これもまた、子どもを産む瞬間のエネルギーが凝集されて、異常な叫び声となって表われてきているわけです。

こうした民俗学上の問題を歴史的に再構築していったらどうなるでしょうか。これをヤマウバ（山姥）の話にフィードバックさせて考えてみたいと思います。ヤマウバは性的には非常に魅力に富んだ女性として描かれていますが、その代表的なものとして、戸隠の鬼女伝説があります。絶世の美女の形をした紅葉というヤマウバが、妖術を使うため都から追放されて、戸隠の荒倉山に住んでいる。彼女は他のヤマウバたちを集結して、徒党を組んでいる。その中には、例えばおまんという名前の鬼女がいて、風のように飛び回って、男をさらってくる。このヤマウバの集団を、都から来た将軍平惟茂が、戸隠の男性の修験者たちの援助を得て制圧するというストーリーになっています。

この鬼女伝説はどのような意味を持っているのでしょうか。私は、これが日本の中世社会のある段階で女の宗教が男の宗教によって排除されていった過程を示しているのではないかと思います。都の宗教的秩序が確立されてくるに従って、女性を宗教者として崇めたり、山の神を祀っていた男女の間の均衡が崩れ、女性が次第に排除されてくる。ヨーロッパの中世社会でも、山間に住んで焼畑文化を担っていた女性たちが、中央から派遣されたキリスト教会の牧師によって「魔女」として制圧されたように、日本の場合にも性的な力を担っている女性文化が男に駆逐される段階があったのではないか。戸隠のヤマウバや鬼女は、そういう男性中心の宗教体制からはみ出し、弾圧された女性排除の事実を物語っているのです。

排除された女性の男性に対する〝自己主張〟が妖怪に投影されて、それが民間伝承として伝えられる。女の幽霊が日本に多いのもその一つの表われだと考えられます。戸隠の鬼女たちは、性的に非常に強い力を持って男を襲う。そ

（2ページ5段めにつづく）

第132回大学共同セミナー

主題＝日本文化の深層
――歴史学と民俗学の接点から――

期日――'85年5月24～26日

＜全体講義＞

Ⅰ　文化史の今日的課題について
　法政大学教授　藤田省三氏

Ⅱ　二つの辺境――「東北」と「ケルト世界」――
　東京大学助教授　樺山紘一氏

＜セクション演習＞

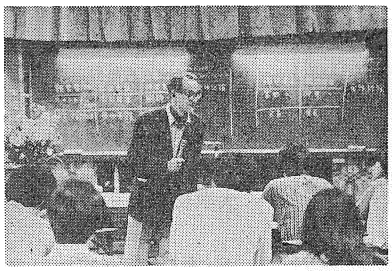
A　公と私――前近代の自由と隷属――
　神奈川大学短期大学部教授　網野善彦氏

B　中央と地方
　国立歴史民俗博物館教授　塚本　学氏

C　イモとコメ――日本民俗文化の多元性――
　国立歴史民俗博物館教授　坪井洋文氏

D　性と妖怪
　筑波大学教授　宮田　登氏

（運営委員）



学生に語りかける全体講義の藤田省三氏

＜参加学生＞61人（内女子28人）慶大（6）、明大（5）、東京外大、高崎経済大、成城大、武蔵大（各4）、筑波大、信州大、ICU（各3）、東大、法大、立大（各2）、東北大、東京学芸大、東工大、東京農工大、一橋大、都立大、跡見学園女子大、津田塾大、東京理科大、日大、明学大、早大（各1）、その他（7）合計24校

◇

日本人や日本文化については、これまで多くの論者によって、様様な視角から論じられてきた。「日本人ほど自らの文化がユニークであると信じている人々はいない」とも言われるが、「日本文化とは何か」といった問いが、日本人の飽くことなき関心の対象であり、かつ知的想像力を豊かにかきたててきたことは疑い得ない。

近年、日本の歴史学は「社会史」や「日常生活史」の導入によって、新たな展開を見せつつある。一方、民俗学も柳田国男以来発掘してきた豊富な庶民の資料をもとに、新たな段階に突入しようとしており、今両者の協同が次第に注目されてきている。

今回のセミナーのねらいは、これまで十分に解き明かされてきたとは言い難い日本文化の「深層」部分に、歴史学と民俗学の最前線から光をあてることを通して、これまでの固定化された日本文化像に新たな視点から再検討を加えようとする点にある。

講師には、セミナーの企画から運営全般にわたりお世話いただいた宮田登氏のご尽力で、こうした新しい動向のオピニオン・リーダー的存在である網野善彦、塚本学、坪井洋文の各氏をお迎えすることができた。息の合った講師陣の下に、24大学から61名の熱心な参加者を得て、「公と私」、「中央と地方」、「イモとコメ」、「性と妖怪」といったキー・ワードを手がかりとしながら、「学会レヴェルの質の高いセミナーが実現した」（宮田氏）。

今回の試みが、日本人としてのアイデンティティを形成する途上にある者にとって、日本文化を読み直す上で、新たな戦略的見取図を作るきっかけとなりえたとすれば幸いである。

◇

セミナー初日は、日本思想史の大家であり、その著『精神史的考察』などにおいて、民俗学的知見をも取り入れつつ日本人の精神構造に独自の照明を与えてきた**藤田省三氏**の講義から開始された。

氏は、わが国の高度経済成長以後の生活様式の根本的変化を例にとりながら、現代文明の一義化の危険性を指摘し、「われわれは、文明がどこかでチェックを必要としていることに気づき始めた。適当な健康なる文明がどのようなものであり、それはいかなる限界を保持すべきかが明らかにされなければならない」と問題を提起された。そのために氏は、「牧畜、農耕文明成立以来の文明史の全体を再検討する」必要を説き、その方法として「今まで文書化された上層部分だけが文化だと思われていたが、掘り起こすべき文化の統合性を担っているのは下層の部分である」との認識の力点移動の上に立って、身近にある小さなことから出発することの重要性を強調された。

現代文明の全体主義的傾向に対する鋭い危機意識に立ちながら、クリスマスの由来、ペンの語源、森と林の区別など、日常生活における一見何でもないことから、文明全体の相貌を浮び上がらせようとする氏の鮮やかな学問的手法は、聴衆に学問することの醍醐味を与えるとともに、テーマにアプローチするための格好の方法を提示することとなった。

夕食後は、共通セッションにおいて翌日のシンポジウムの予告編をなすべく、四人の講師が各々の問題意識を披露。8時から各セミナー室に分れて第一回目のセクション演習に入った。

◇

二日目にはセミナーのいわば圧巻をなすシンポジウム形式による報告と討論が行われた。この方式は、今回初めて試みられたものであるが、最初に主報告者がそれぞれのテーマに即して約20分間の報告を行い、それを受けて副報告者が10分間コメントを加える。これを歴史学と民俗学の組み合わせで交互に行うことによって、両者の統一的視座からテーマをより鮮明に把握しようというわけである。

午前中は民俗学（宮田、坪井氏）、午後は歴史学（塚本、網野氏）からの報告を得て、ここに両者の自由な交流と生きた対話の場が成立した。

◇

宮田氏は、**報告1「性と妖怪」**（要旨はフロント・ページを参照）で、「産む性」としての女性を媒介項としながら、妖怪の中に女性の力が浮き彫りにされてくることに着目。豊富な民俗的データを再構成することにより、曖昧でつかみにくい日本文化の深層世界に切り込んだ。

これに対し、副報告者の塚本氏は、「日本の妖怪の原型は異文化人の像に仮託され、それをもとにしているのではないか」、「動物と人間の連続的世界観が、日本人の妖怪像形成の上に重要な役割を演じたのでは」など別の角度からの指摘を行った。

●報告2――――●

イモとコメ

＊

坪井　洋文

「文化（culture）にあたるものを記紀では〝風俗〟という言葉で表わしていた。これには〝オホミタカラノアリカタ〟と〝クニブリ〟の二つの読み方があり、前者は稲霊の象徴である天皇の所有物

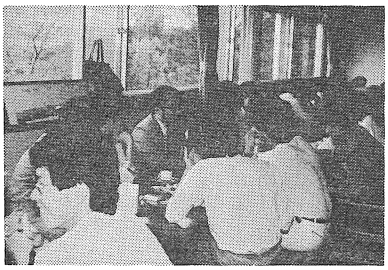
（前ページからつづく）

れに対し、男は絶えず恐怖に苛まれていなければなりません。男の心意にある潜在意識が、性と妖怪を結びつけるキーワードであり、女の妖怪を多く輩出させているのではないかと思います。

（文責・編集者）

としての国民とその文化、後者は各地域の文化を意味していた。日本の各地には、元日にイネの象徴であるモチを食べてはならないとする伝承がみられるが、モチをタブーとする現象は、中央で選択された稲文化がただ地方へ伝播したのではなく、強制されたプロセスであったことを物語っている。真の地方文化や民衆文化をとらえるためには、稲作を受容してゆくことによって排除されたイモを象徴とする畑作文化に注目しなければならない」

従来の民俗学の概念では十分にとらえきれなかったクニブリとしての地域文化を強調した坪井報告に対して、網野氏は律令時代の中央への貢物に獣などの山の幸に比べ、魚貝・海藻などの海産物が多いことに注目し、「海の民の文化が日本文化の中の極めて根の深い所に存在している。今後は日本人の味覚体系を含めて、日本の文化複合を考えてゆく必要がある」と、これまで盲点となっていた日本の海民文化の役割を強調した。



討論続行――ティー・タイムのひとこま
中央は樺山紘一氏

また、「イネを絶対とした中央文化は一つでも、クニブリは多様だった。クニブリ同士の相互交流も考えるべきだ」（塚本氏）、「幕末に天皇家の儀礼食として、正月にイモを食べている。これは逆にクニブリの中央への影響ではないか」（宮田氏）など次々に興味深いコメントや疑問が提出され、議論は大きな盛り上がりを見せつつ、午後のシンポジウムⅡへ引き継がれた。

◇

昼食後は、**樺山紘一氏**による**全体講義**Ⅱから再開された。氏はヨーロッパ中世史の専門家だが、日本文化にも深い造詣を持つ柔軟な発想の持ち主として知られている。氏は、ケルト人の文化はヨーロッパ文化にとって、「文化の深層」、「空間的辺境」、人間と超自然的世界との接点としての「異界」の三つの意味を持つことを示し、同様の構造が日本の「東北地方」にもあてはまることを指摘。特に、〝異界としての東北〟について、「日本列島に住んだ多くの人々の中で、東北人ほど想像力の世界に住んだ人々はいないだろう。そこには列島を超えて、直接世界へ繋ってゆくようなコスモロジーを生み出す独特のメンタリティーがある」と述べ、「日本」という一つのまとまりを持った〈固体〉の中から外を向き、異なった世界を見てゆく視点の重要性を提示した。

◇

続いて、交友館でのティー・タイムをはさみ、樺山氏を交えて歴史学からの発題を中心としたシンポジウムⅡが続行される。

●報告3――●

中央と地方

＊

塚本　学

「地方の歴史を見てゆく上で有効なのは、日本人や日本文化を、はじめから一体性を持ったものとして前提にしないことだ。日本文化の基層を問題にする時、現代の日本の国土と一致する空間に、他の世界と明確に区別される文化があったと見るよりは、例えば、西九州と朝鮮に連なる基層文化があったと考える方がはるかに現実的だ」

「日本」文化といった発想の仕方は、ややもすれば各地域の多様な文化を〝没個性〟的にとらえることになりかねないとする氏のアンチテーゼに対して、「海は日本列島を隔離したばかりではなく、人の交流を促進した」（網野氏）のであり、特殊性ばかり強調するのではなく、日本文化をもっと流動的に柔軟に把握してゆくべきことが確認された。

●報告4――●

公と私

＊

網野　善彦

「前近代社会において、百姓はどうして公的隷属の徴として年貢のような負担を続けてきたのか。私の結論は、それが彼ら自身の自発的な意志によっているということだ。百姓や平民にとって年貢は、強制的に土地から取られる地代などではなく、自分が属している集団＝共同体のメンバーであることの義務意識の表われではないか」

百姓は公の隷属民か自由民かという歴史学上のホットな論争点を問題とした網野氏に対し、「記紀では、公（オホヤケ）に対する語は敵（アタ、カタキ）であった。どのようにして公↔私という対照関係ができたのか興味深い」（坪井氏）、「天皇や国家へ通じるものだけが〈公〉で、後は〈私〉とする考え方には疑問がある。公にもさまざまなレヴェルがあり、それらの間の拮抗、葛藤関係こそが重要」（塚本氏）との指摘は、特に重要に思われた。

◇

最終日の全体集会は、学生からの演習報告と三日間にわたるセミナーの総括討論にあてられた。前日のシンポジウムやセクション演習から持ち越された問題をきっかけに、学生から活発な発言が相次ぎ、日本人のアイデンティティ、歴史学と民俗学の目的と将来像、文化の深層から逆照射された近代天皇制の問題などをめぐり、正午すぎまで熱のこもった議論が展開された。

これらの討議の過程を通して次第に明確にされたことは、日本文化の深層への問いが、現代文明の閉塞状況に対する厳しい批判を伴っているということである。そして、それはまたどこかで再生へのエネルギーを回復する回路を発見したいという願いと結びついている。その場合に留意しなければならないことは、「日本人や日本文化を〝民族〟や〝国家〟という固定した概念の下に一束にして考えない」（塚本氏）ことであり、そのために今日の歴史学や民俗学の提示する方法は、一見『変革』とは無関係にみえる日常生活のささやかな経験を、〝国境を越えた〟大きな問題へと接続し、おし広げてゆくことである。

今回のセミナーが示唆しているように、もし「日本文化」が決して一枚岩ではなく、多元的だとするならば、「日本人」は未来においてより多くの可能性を握っていることになる。そして、その実現は、参加者一人一人に残された大きな宿題と言わねばならない。

●参加学生の感想●

▼「かごの中の鳥」から一歩を踏み出して

東京外国語大学外国語学部四年　河野左千子

今回、初めて大学共同セミナーに参加しました。最終学年を迎え、いよいよ本格的に卒論に取り組むようになって初めて勉強することに面白みを覚えた今日この頃ですが、セミナー・ハウスでの三日間は、いろいろな意味で、刺激を与えてくれたように思われます。

シンポジウムでの先生方の討論では、生きた学問がいかなるものであるかを眼のあたりに見て、より身近なものとして感じとること

ができました。また、他大学の人人との交流は、外語大という単科大学にどっぷりつかっている私にとって、大変、新鮮なものでした。そして、このセミナー・ハウス全体を包みこんでいる自然とその中での生活には、我々の日常生活が、いかに自然と切り離されたところで営まれているかを、認識させられました。初日に、洗面所へ行くといったほんの些細なことにも不便さを感じた自分を情なく思います。技術の進歩を諸手を上げて受け入れてきた人間は、いつの間にか、飼いならされて野性を失った「かごの中の鳥」と化してしまったのではないでしょうか。第一日目の講義での藤田先生が言われた「文明の行き過ぎのチェック」の必要性を感じます。

セミナーでの経験をふまえて、今の大学生活を考えてみると、大学の講義も、もっと活性化されるべきだと思います。学生の意識にも問題があるのでしょうが、講義のあり方にも大いに改善の余地があるのではないでしょうか。セミナー・ハウスで行われている、大学相互の交流や教授と学生との接触といったことが、大学側でも、推し進められるべきだと思います。大学共同セミナーは、このような大学の活性化に、大いに貢献できると思います。今後も、多くの人々が参加されることを期待します。

▼私のセミナー初体験
――刺激と触発の連続――

成城大学法学部四年
伊藤 敦生

藤田先生がおもむろに語り始められる。つい先ほどこの奇妙な「家」に着いて、ただ呆然とするばかりの私も、次第に藤田先生の独特な語り口にひき込まれてゆく。雨の音と先生の声だけが「家」の中に響き渡る。こうして私にとって初めての大学共同セミナーは始まった。

「日本文化の深層」と題された今回のセミナーは、様々な意味で刺激的な体験だった。それは何よりも、大学では知ることのできないものを得ることができたからであろう。六人の先生方がテーマに従って様々な角度から報告され、私たちに問題点が提示される。その多くは私がかつて学ぶ機会のなかった問題だったから、理解しようとする態度に終始したことは否定できない。しかしいろいろな知識を摂取しようとする知的好奇心に、私の心が次第に支配されて行くのを実感するとき、私は本当に嬉しかった。久しぶりに充実した気分を味わったのである。

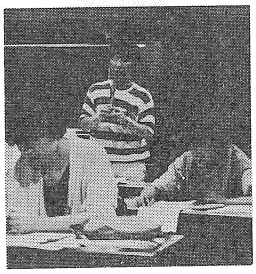
刺激的だったのは講義の内容にとどまらない。それは私とともに参加した学生の姿に対してである。厳しいプログラムにもかかわらず、常に緊張感ある講義が展開しえたのは、このセミナーに参加する学生たちに学究的な態度が貫かれていたからだと思う。さらに報告後になされる質問の質の高さもさることながら、休憩中にとび交う会話の中にさえ刺激と触発を受けたのは、私一人だけではあるまい。このように刺激的な雰囲気は、半ば強制的に聴かされる講義ではまず感じられない。講義が教授と学生との協力によって創られることを改めて感じたのである。

ところで私が所属したBセクションは他と比べて実に個性的だったと思う。それは八人という少なさに加え、社会人、院生、学生と分かれるだけでなく、専攻が皆異なるというほど徹底していた。その多様さは演習ではっきりあらわれた。五〇分で自己紹介が終わるやいなや、テーマ「中央と地方」は原型をとどめないほど変型して論じられ、地方史と郷土誌、文化人類学と歴史学、歴史の連続性と非連続性など、実に多様な問題が提起された。もちろん十分な討論がなされたとは言えない。けれどもその討論を通して仲間の意見を聴きかつ理解しようとしたことは、実に意義深い経験であったと思う。

私のセミナーでの印象は以上である。短い期間だったが充実した三日間を送れたと思う。また機会があればセミナーに参加したい。そしてこのような良い企画でありながら、61名の参加者にとどまるのは、実にもったいない。もっとセミナーの存在を友人に知らせるよう努力しようと考えている。

▼至福に満ちた「魔の山」
――学問への意欲をかきたてられて――

東京学芸大学教育学部三年
小池 淳一



私は、教育学部の中で国文学を勉強しているのだが、文学の研究も日本文化のある型を追求しているように思う。その追求の過程で文化の深層から文学が湧き出している――文学はそうした文化の闇的部分に支えられ、またそれを表象するものに他ならない――と考え、今回のテーマに興味を持ったのであった。

セミナーは折悪しく、雨が降る中で始まったのだが、藤田先生の全体講義は文化史の課題について豊富な引例に基づく示唆に富んだもので早くも知的興奮がかきたてられた。そしてその興奮は、そのままセクション別の演習に引き継がれた。自己紹介の中で、はじめて出会う緊張がほぐれていき、自分たちの専攻や諸先生のお話を媒介に深夜まで語り合ったのを思いだす。

二日目のシンポジウムや樺山先生のケルト世界からの視点を提示する講義にもまた思考の喜びを呼び起こされていった。

セミナーの中心は、こうした知的刺激に満ちた、新鮮な討議や講義であることはいうまでもないのだけれど、それでは時間が足りなすぎる。昼間の刺激を、参加者たち自身がどのように受けとめたか、各自の意見を混じえての、時間のたつことも忘れた、深夜の語り合いが、何よりも貴重であったように思われる。

日常の大学での「受けさせられる」講義（私の在籍している大学では特にその傾向が強いのだが）に比べて、主体的に、問題意識を持って取り組んだ講義の何と身につくことか。

書物を通して名前を知るだけであった著名な先生方に親しく問いかけ、教えをうけ、仲間たちと語りあう。そこには通常の大学生活では思いもよらない高密度の時間があった。

惜しまれることといえば、他のセクションの人たちとも、もう少し交流が持てたら、という気がしないでもなかったが、それでも最終日の朝、私たちはもちろん、先生方までもが、前夜（翌朝？）の討論に、疲れ、そして満ちたりた表情であった。

大学や学部、学年を越えて、快い学問への意欲にかきたてられてバスでセミナー・ハウスを去った。その時、至福に満ちた「魔の山」から降りていくような気がしたのは私だけではないだろう。

●寄贈図書
’85年1～2月

「IDE」258～259　民主教育協会殿
「早稲田フォーラム」46　早稲田大学総長室殿
「新しき村」1～3月号　安達義明殿
「ヒマラヤ文献目録」　河内工房殿
「フランス経営史」　原 輝史殿
「海運と造船業」　山下幸夫殿
「村田大造著作集」9巻　佐藤岩子殿
「安楽死から尊厳死へ」　宮野 彬殿
「歴史としての学問」「転換期の科学観」「市民のための科学論」　中山 茂殿
「老人島」　笠原正成殿
「大学論集」　武蔵大学経済学会殿

法人ニュース

第59回理事会・第40回評議員会

’85年5月21日／銀行倶楽部

〔出席者〕
＜理事＞中川秀恭、永井道雄、天城勲、村井資長、村山松雄、飯田宗一郎、西田亀久夫
＜監事＞鈴木幸寿
＜評議員＞川原栄峰、小川芳男、岡宏子
〃　委任状による者　理事12名
評議員73名
（敬称略）

＊

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり議事に入る。西田専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答ののち、各案件を承認可決した。

▼評議員人事案について

学長交代に伴い、東京農工大学長・喜多勲、工学院大学長・北郷薫の両氏の新任。諸星静次郎、伊藤鄭爾の両氏の退任。

▼役員人事案について

常務理事には東京大学総長・森亘、東京都立大学総長・下山瑛二の両氏の新任。早稲田大学教授・村井資長氏の退任。

▼昭和59年度事業報告案について

▼昭和59年度決算案について

事業収入は前年実績比利用者数減少に伴い減収であったが、諸経費の節減によるカバーに努め収支尻は一、五〇〇万円の黒字を繰り越した。なお、具体的には別掲の「収支計算書」に大略記すとおりである。

監事からは「五九年度の会計および業務とも適正に処理されており、とくに問題はない」との監査報告がなされた。

▼開館20周年記念事業について

記念募金の進捗状況と記念行事の計画案について報告がなされた。

▼常務理事会への委任事項について

専務理事の日常事務について

いずれも内容が固められておらず、提案は取り下げられた。

昭和59年度経常部収支計算書（59.4.1～60.3.31）

1．収支計算の部

収入の部 科目	金額（円）	支出の部 科目	金額（円）
基本財産運用収入	278,233	人件費	135,177,015
事業収入	160,665,795	法人諸費	1,390,222
宿舎収入	122,225,520	事務費	16,765,255
施設収入	27,530,970	土地建物費	22,133,173
食堂収入	10,909,305	事業費	64,039,667
施設改修協力金収入	9,394,200	一般事業費	18,559,182
協力会員校会費収入	57,450,000	普通セミナー	31,455,066
補助金等収入	12,870,000	学生指導セミナー	10,304,332
寄付金収入	603,739	国際プログラム	3,721,087
セミナー会費収入	3,560,570	固定資産取得支出	4,456,000
雑収入	9,269,890	繰入金支出	7,836,419
繰入金収入	8,537,419		
特定預金取崩収入	4,165,000		
前期繰越収支差額	36,643,549	支出合計	251,797,751
収入合計	303,438,395	次期繰越収支差額	51,640,644

2．正味財産増減計算の部

増加の部 科目	金額（円）	減少の部 科目	金額（円）
資産増加額	8,456,000	資産減少額	37,313,738
負債減少額	4,165,000	引当金増加額	4,000,000
前期繰越増減差額	480,146,284	減少額合計	41,313,738
増加額合計	492,767,284	次期繰越増減差額	451,453,546

昭和60年度経常部収支予算書（60.4.1～61.3.31）

収入の部 科目	金額（円）	支出の部 科目	金額（円）
基本財産運用収入	211,000	人件費	139,078,000
事業収入	163,585,000	法人諸費	1,900,000
宿舎収入	125,222,000	事務費	17,096,000
施設収入	27,253,000	土地建物費	21,910,000
食堂収入	11,110,000	事業費	70,096,000
施設改修協力金収入	9,690,000	一般事業費	21,418,000
協力会員校会費収入	57,450,000	学生指導セミナー	11,242,000
補助金等収入	12,691,000	普通セミナー	33,932,000
学徒援護会	10,866,000	国際プログラム	3,504,000
日本国際教育協会	1,825,000	固定資産取得支出	11,500,000
寄付金収入	500,000	学生指導セミナー繰入金支出	4,376,000
セミナー会費収入	3,610,000	20周年記念事業費	4,000,000
雑収入	8,688,000	予備費	1,000,000
千人会繰入金収入	3,826,000		
経常部繰入金収入	4,376,000		
積立預金取崩収入	6,329,000		
当期収入合計	270,956,000	当期支出合計	270,956,000
前期繰越収支差額	51,640,000	次期繰越収支差額	51,640,000
合計	322,596,000	合計	322,596,000

●寄付金報告

’85年2～5月

＜教育プログラム資金＞
二五、九二五円　第131回大学共同セミナー参加者一同殿
一五、六二〇円　第132回大学共同セミナー参加者一同殿

＜植樹資金＞
二〇、〇〇〇円　明治大学長尾ゼミ殿
五、〇〇〇円　(財)日本生産性本部霧積会殿

＜一般寄付金＞
一〇、〇〇〇円　東京純心女子短期大学音楽・美術科新入生オリエンテーション殿
一五、〇〇〇円　杏林大学保健学部殿
三〇、〇〇〇円　東京薬科大学新歓祭実行委員会殿
三七、〇六〇円　文京女子短期大学新入生セミナー殿
七、五〇〇円　文教大学女子短期大学部殿

＜植木・苗木＞
あんず一株　東京都立川短期大学自然探究部殿
ウメウツギ　青山学院大学岸ゼミナール殿
小梅　吉川孔敏殿
きゃら一株　荒川孝子殿
もみじ一株　飯島吉雄殿
椿（五〇株）　工学院大学専門学校電気技術科中西ゼミナール殿
プラタナス苗木（三株）　東海大学医学部新入生研修会殿
あんず（一株）　杏林大学保健学部フレッシュマンセミナー殿
ハナミズキ（赤）　十文字学園女子短期大学家政学科新入生歓迎合宿殿

◆千人会……'85年2～5月

◇現在会員一、五五三名（実会員数）です
（通算入会者一、七四六名）

◇新しく会員となられた方々
36名（第77回報告（申込順））

B　共立女子大学助教授　入江　和生殿
B　日本生産性本部顧問　櫻井　清彦殿、
C　拓殖大学語学研究所非常勤講師　福永　正明殿
B　筑波大学学校教育部講師　二谷　貞夫殿
C　松下政経塾生　佐藤　成紀殿
C　国際基督教大学教授　青柳　清孝殿
B　中央大学教授　長内　了殿
A　㈲大学セミナー・ハウス食堂　酢屋　善元殿
C　㈲大学セミナー・ハウス食堂　森山ヨシ子殿
C　学習院大学教授　小川　智哉殿
C　慶応義塾大学助教授　村瀬　旻殿
A　帝京大学教授　村部　一二殿
C　文教大学専任教員　広内　哲夫殿
A　専修大学助教授　常行　敏夫殿
C　明治学院大学専任講師　京藤　哲久殿
A　千葉短期大学講師　国分　久子殿
C　東京学芸大学助教授　伊藤　説朗殿
C　都留文科大学教授　大島　真殿
B　早稲田大学教授　中嶋　博殿
C　筑波大学講師　佐久間まゆみ殿
C　東京家政大学教授　河村フジ子殿
B　東海大学教授　吉田　研介殿
C　㈶大学セミナー・ハウス食堂　堀口　幸一殿
A　東京学芸大学助教授　金谷　憲殿
A　立教女学院短期大学助教授　宮本　瑞夫殿
B　立教女学院短期大学助教授　滝口　俊子殿
B　高千穂商科大学助教授　梶原　豊殿
C　㈱アイディ・コミュニケイション局勤務　前川　真里殿
C　東京都立大学助教授　宮川　彰殿
B　国立教育研究所研究員　安原　義仁殿
B　明治大学教授　森川八洲男殿
B　東京中央郵便局第一普通郵便課　熊川　忠殿
A　大東文化大学教授　鈴木　謙三殿
A　東京都立大学教授　小野寺嘉孝殿
A　国士館大学講師　石川　博明殿
B　元法政大学一高教員　福島　明殿

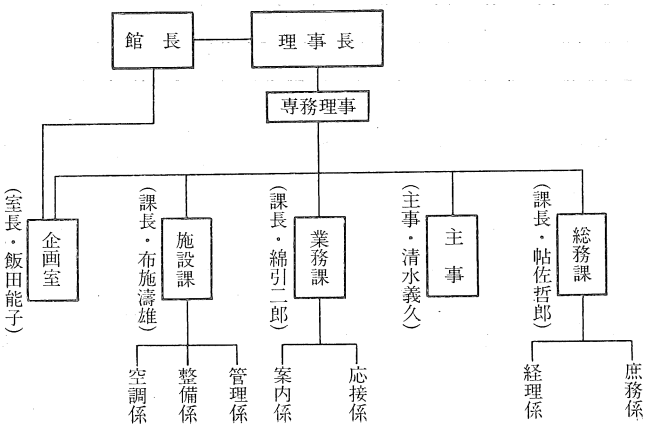
◇会費ありがとうございます
高村弘毅、仙田哲、岩佐凱実、小川政亮、谷資信、東洋、内山正熊、本谷勲、中利太郎、吉田公保、富沢賢治、板橋並治、中村孝之、吉田耕作、高木亀一、平岡勇、一丸節夫、上田明子、矢田俊文、清水畏三、目黒謙次郎、石井正博、竹村研一、山田圭一、牧野誠一、遠藤平治、昌谷春海、大岡信、福永寿巳夫、寺東寛治、松島千代野、斎藤眞、本間仁、手島修蔵、勢山秀子、中岡二郎、永島孝、松元三郎、井原恵治、山口俊夫、久保亮五、蓮見音彦、川崎正三、尾田幸雄、野澤晨、島美喜子、磯直道、西川恭治、崎野滋樹、北原文雄、内藤博、笠耐、彦由一太、武田孟、高松正昭、岩永達郎、中村妙子、熊澤義宣、佐藤百世、平野由紀子、森昭彦、小泉仰、馬越徹、玉田啓八、人見宏、増沢利幸、梅村魁、中山昌、寺中良二、一松信、豊田陽子、若林玄修、櫻井清彦、小林哲也、今井清一、永野賢、西田貴子、萩原稔、五唐勝、石原忠男、白川和雄、勝見允行、原一雄、瀬部孝、佐藤成紀、永井道雄、最上武雄、岡村総吾、山澤逸平、大西清、安藤英治、板垣雄三、井関昇、村松林太郎、大泉充郎、柴田泰比古、石堂常世、松尾弘、藤木宏幸、市川邦彦、箕輪成男、福田敦夫、土井恵美子、高橋和之、石坂巌、太田淳一、大田末穂、谷口汎邦、福西基、小幡史朗、前島郁哉、富岡幸雄、加藤六美、寿里茂、鴨澤巌、護雅夫、柘植敏治、佐藤公孝、木田宏、小倉芳彦、丸山眞男、熊坂敦子、小山五郎、中島直忠、高瀬文志郎、金子靖、木村増三、村上千賀子、松澤正夫、鈴木友二、山田良之助、吉沢四郎、池原義郎、池田義人、麻島昭一、瀬田裕司、林潔、大塚正夫、宇野義方、神保信一、酢屋善元、森山ヨシ子、佐藤慶幸、田所光子、藤井彌太郎、渡利千波、手塚喬介、木村尚三郎、村山松雄、那須宗一、宮腰賢、望月清司、本明寛、浦野伊和子、小菅東洋、望月厚志、舘逸雄、富塚文太郎、広瀬五十鈴、勝田有恒、佐藤毅、山本洋、林邦夫、寺内礼治郎、龍池隆、辻清明、向坊隆、石弘光、原田敬一、関根隆光、細井勉、石渡毅、中田良平、井上百合子、吉田宏晢、村上正夫、小原啓義、松澤通生、熊田陽一郎、柳下勇、安藤賢一、豊島広司、増田武男、大槻盛一、秋間実、塩田庄兵衛、矢野洋四郎、高峯一愚、鈴木達雄、野田倬、村田全、堤彪、江渕浩美、久保田浩、井上繁、内山力、堀口幸一、高木健太郎、岡村秀勇、染谷恭次郎、鬼塚宏太郎、堀野定雄、西勝、竹内昭夫、羽田三郎、伊倉退蔵、伊藤意智郎、横山勝信、井上宇市、前田愛、水野弘文、下出積興、海老根宏、太田正孝、清水昭次、小林弘、小泉一郎、村瀬興雄、加藤秀俊、芳野赳夫、岡山礼子、小島蓉子、小原清成、村田喜代治、冨山芳正、桐生冨久、木原太郎、向山文雄、福田一郎、狩野紀昭、上村学、芳賀徹、下森定、中村英雄、山之内靖、佐伯彰一、近藤正夫、原豊、本吉修二、北野弘久、中島康孝、木島康彦、内田祥哉、国分久子、梅沢文輔、伊藤喜栄、工藤康雄、大原栄一、矢澤大二、大村晴雄、鈴木悌二、春田素夫、佐藤経明、児玉昭太郎、後藤捨男、椿弘次、金子六郎、石川博明、角田稔、川喜田二

新事務組織の発足

新年度に入り、西田専務理事の下で事務組織の検討がなされてきたが、6月1日付で新体制がスタートすることになった。

併せて「組織運営規程」も新たに設けられ、これまで部分的に混乱していた各部局の事務分掌が整理された。

大学セミナー・ハウス事務組織



●業務通信

'85年4・5月
新緑の丘の合宿から

春休みを利用しての合宿の賑わいの中で、ハウスは今年も新年度に移行――そして早々4月3日には、新入生オリエンテーションの第一陣を迎えた。以後4・5両月にかけては、各大学の学部、学科ないしクラス単位の新入生合宿研修がほとんど連日のように展開され、例年ながら新緑のこの丘はフレッシュマンの活気に溢れた。オリエンテーションを中心とする両月の利用状況は左記のとおりで、ともに前年度を上回る数字である。

	グループ数	宿泊延人数（人）	定員比（%）
4月	一〇八	六、〇四九	七五
5月	九八	五、四七五	六五

●新入生合宿実施概況

4・5両月中に実施された新入生オリエンテーションでクラス単位以上の規模の合宿は、**別表**に示すとおりで、計三九件（二五校）、五、二一六人（うち教職員四五一人）、延べ六、一一七人（五〇〇人）である。これは両月の総延人数の五三%に当たる。

●新入生合宿、今春の話題から

フレッシュマンの季節の皮切りは、今年も東京薬科大の新入生歓迎合宿。在校生が、入学前に新入生を迎え、生活交流の中で大学生活への導入を助けようとするもので、今年で七年目である。

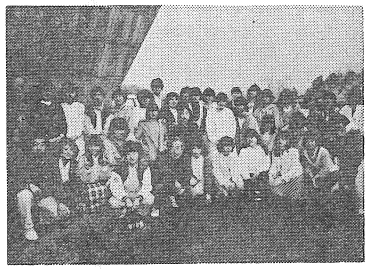
東海大（医）、杏林大（医）、同（保健）など医科系の学部は、今季も入学直後の開催。いずれも二泊三日であるが、東京薬科大のそれとは対照的に教師主導のオリエンテーションである。また、近年は教師と上級生の協同企画・運営によるものが増えている。慶大国際センター主催の「留学生オリエンテーション」では、七ヵ国からの留学生（上級生を含む五五名）と日本人学生・教職員（五四名）との交流に重点がおかれた（**8ページ写真**）。

ハウスでの開催が一〇年以上の新入生合宿が少なくない。日本女子大（社会福祉）は一七年目である。津田塾大のフレッシュマン・キャンプは'67年以来の開催。以後学科によって中断の時期があったが、'81年には英文、国際関係両学科も再開されて現在に至っている。国際関係学科（二九二名）のキャンプは、今年は4月中に行われた。単一グループとしては今季最大規模で、全館使用による合宿であった。例年同様、最終日には大東百合子学長を迎え、講堂での和気に満ちた昼食パーティで同キャンプを締めくくった。本号の『わたしたちの合宿』（**9ページに別掲**）では、ハウスとのご縁も深い百瀬宏教授から、同学科恒例のフレッシュマン・キャンプをご紹介いただいた。

初めて実施されたのは、駒沢大（仏教学部）、日本獣医畜産大（畜産）、東京純心女子短大（美術・音楽）、十文字学園短大（家政）の四校。いずれも合宿によるオリエンテーションの成果を高く評価され、今後の継続を約された。

●新入生の歓迎風景点描

大学の枠をこえて新入生を暖かく迎える光景が今年も見られた。たとえば週末4月28日、夕食時の食堂（七グループ二三〇名）では、学習院大（学生相談所）や東京医科歯科大（歯科衛生士学校）などの新入生グループが紹介され、明学大グリークラブの八〇名が美しい合唱三曲を歌って歓迎した。また、同日開催された民家・遠来荘での茶会では日本女子大（社会福祉）などの新入生たち（四グループ一〇五名）が地元奉仕者からの歓待を受けた。



合宿を終えて――東京学芸大学幼稚園教育科の新入生たち（本館入口）

新入生の感想から

オリエンテーションで来泊した各大学の新入生数名ずつに、大学生としての抱負や合宿体験の感想などを綴っていただいた。以下、その一部をご披露したい。

郎、阪本泉、青木清明、平野文彦、阿部弘、梶原豊、柏原啓一、山本幹夫、木村建一、木村健二郎、広内哲夫、久保田きぬ子、内田市五郎、今井栄、岡田巳代次、橋口英俊、加藤一郎、近藤裕、小林保彦、天城勲、斎藤幸一郎、峰岸純夫、山崎邦彦、荒井献、堤辰次郎、奥山典生、今井義夫、千野熊男、有賀弘、三宅義夫、澤島侑子、下城康世、福田雄、野見山不二、崎田直次、福島明、関口忠、石川孝夫、古西信夫、竹村猛、深海博明、荒川有史、川名明、神保信一、村瀬旻、小野寺嘉孝、徳永勇雄、柴垣和三雄、吉田光孝、松井源吾　（敬称略）

千人会員からの便り

お蔭様にて元気で還暦を迎えることができました。三月には久しぶりで中大の学生諸君と集中ゼミでハウスに伺い、お世話になりました。大学教育に機能する役割の素晴らしさに感銘しております。

中央大学教授　富岡幸雄

◇

大学セミナー・ハウスが、その構内の樹々とともに、大樹の森に成長してゆくことを祈ります。

大学入試センター教授　中島直忠

◇

ここ山中湖畔にもようやく春の到来です。下柚木の里にはどんな春風がそよいでいることでしょう。

広瀬五十鈴

◇

メキシコ、フランス、オランダ、そして最後は中国と、昨年4月から今年3月まで殆ど日本にいませんでした。送金おくれて申し訳ありません。

中央大学教授　寺内礼治郎

◇

還暦のお祝詞を頂き、有難うございました。

日本女子大学教授　井上百合子

◇

千人会の発展を祝します。私もこの四月十二日で八十四歳になりました。元ハウス職員　豊島広司

◇

私もA会員の年齢になっていると思いますので、今後BからAにさせていただきます。

中央大学教授　村田喜代治

◇

小生の古稀の御祝詞を頂き有難く深謝申し上げます。

三井銀行　木島康彦

◇

喜寿を迎えて、健康を大切にしています。

早稲田大学名誉教授　鈴木悌二

◇

数年先には吾々も八王子の住人になれそうです。その節はよろしく。　都立大学教授　児玉昭太郎

◇

美しいカードありがとうございます。みんなで「セミナー・ハウス」を大切にしていきます。

青山学院大学教授　小林保彦

◇

健康で平和と文化のために、微力を最後の一日まで尽したく、努力しています。

日本女子大学名誉教授　野見山不二

◇

文教研夏の全国集会で、またお世話になります。講堂の冷房、一日も早い実現を願っています。

国立音楽大学　荒川有史

❶ 東京学芸大学生物学科　**海野義晃**

すばらしい自然に恵まれたセミナー・ハウスでの交流合宿は、われわれ一年生にとって非常に有意義なものでした。夜の部で行われた各教官の講義は、これから学ぼうとする研究への興味を大きく抱かせてくれましたし、その後の仲間との交流では、これからの大学生活における多くの友人を得ることができました。この合宿を通してわれわれは大学生という認識をさらに強く持つことができたと思います。

❷ 都立立川短期大学　**堀田綾子**

地形に逆らわず設計された建物、深い、深い緑の空間、そして友達との夜通しの語らい――。大学生になると、学年全体が集まって何かをやるという機会がほとんどなくなってしまうだけに今回のセミナー・ハウスでの体験は貴重でした。このように恵まれた自然に囲まれた交流の場は、そう幾つもないのではないでしょうか。ひたすら一泊二日という、時間の短さが惜しまれてなりませんでした。

❸ 駒沢大学仏教学部　**野村秀幸**

最初はただ無意味な遠足程度と思っていたが、あれから一週間過ぎた今では、自分の中でかなりの意味を持っている。まず第一に周りがどんな学生かということがわかった点。それまでは大学生とは自分の考え方を持っていない奴や、ただの甘ったれ位しかいないだろうと思っていたが、ちゃんと魅力を持った奴が何人かいたこと。それを発見しただけでも大した収穫である。そして二番目にはこの学部で学ぶことが多くあるのを再確認できたことであろう。

夕食パーティで交歓――慶大留学生オリエンテーション（大学院セミナー館）

❹ 杏林大学医学部　**戸部正則**

初日は、あまり人と話すこともできずにいたが、二日、三日とたつにつれて、顔も名前も覚え、友達もできた。セミナー・ハウスの施設が大変良かったせいもあったが、同じ志を持つ仲間として意外に早くうちとけ合った。私たち医学生は、他の学部とちがって、六年もの間ひたすら学業に専念しなければならない。そんな中で心の支えとなるのは、自分自身の志と良き友である。この合宿をもとに友をふやし、これから頑張りたい。

❺ 東海大学医学部　**姫野信治**

今春やっと大学生になれ、期待半分、不安半分の中での八王子合宿でした。その中で不安のかなりの部分が解消されました。

このセミナー・ハウスには、人と人とが素直に付き合える雰囲気があったような気がしています。大人に向かう年代のわれわれに、このような場があることは、とてもラッキーだと思います。

利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
日帰り利用を除く

■4月

（108グループ、延六、〇四九人）

東京大学教授　見田　宗介
東京都立大学教授　峰岸　純夫
中央大学瑞法会　小林　保彦
青山学院大学教授　田村　皖司
千葉大学医用電子工学研究会　山田　有策
杉野女子大学教授　菊地　元一
東京学芸大学助教授
青山学院大学教授
青山学院大学教授
J・E・ランデス
日本大学教授　小林　巧
明治学院大学講師　水谷　史男
東京外国語大助教授　在間　進
慶応義塾大学講師　内山　太郎
青山学院大学助教授　中澤　進一
青山学院大学教授　大谷登士雄
青山学院大学教授　吉田　靖彦
明治学院大学教授　秋山　智久
成城大学茶道部
駒沢大学教授　寺中　良二
駒沢大学経済学研究会
淑徳大学講師　手打　明敏
千葉大学教授　中村　達也
東京薬科大学新入生歓迎キャンプ　深沢　実
早稲田大学講師　西野　万里
明治大学教授　原田富士雄
中央大学教授
日本大学芸術学部アナウンス・サークル・スタンバイ
国際基督教大学助手　山口　和孝
千葉大学助教授　武蔵　武彦
立教大学観光学科新入生キャンプ
慶応義塾大学教授　山田　辰雄
東海大学医学部新入生研修会
東京大学助教授　馬場　修一
横浜国立大学歴史学教室
青山学院大学教授　深沢　実
明治大学教授　寺田　由永
早稲田大学教授　市川　孝正
工学院大学工業化学科新入生オリエンテーション
杏林大学医学部新入学生宿泊セミナー
駒沢大学仏教学部新入生オリエンテーション
駒沢大学教授　石井　啓雄
中央大学教授　古城　利明
中央大学「心理学」会新入生歓迎セミナー
成蹊大学教授　宇野　重昭
東京都立大学教授　山住　正己
杏林大学保健学部フレッシュマン・セミナー

昭和60年4・5月 新入生オリエンテーション実施状況

学校名	参加者数
●4月	
東京薬科大（新入生歓迎キャンプ）	*227(1)
立教大・観光学科	154(6)
東海大・医学部	*166(14)
工学院大・工業化学科	141(22)
杏林大・医学部	*115(11)
東京純心女子短大・美術科，音楽科	114(14)
駒沢大・仏教学部	223(21)
中央大・「心理学」会	40(―)
杏林大・保健学部	*127(5)
東京コンピュータ専門学校	208(19)
東京コンピュータ専門学校	246(19)
東京学芸大・幼稚園教育	38(5)
東京都立大・機械工学科	65(5)
東京農工大・農業工学科	39(5)
慶応義塾大・国際センター（留学生）	109(10)
中央大・哲学科教育学専攻	68(7)
津田塾大・国際関係学科	292(27)
日本女子大・社会福祉学科	116(9)
学習院大・学生相談所	40(4)
東京医科歯科大・歯学部付属歯科衛生士学校	*68(6)
●5月	
十文字学園女子短大・家政専攻	216(7)
東京都立商科短大・商学科	269(19)
津田塾大・英文学科	264(21)
東京都立商科短大・商学科Ⅱ部	120(13)
東京電機大・電子工学科	144(7)
中央大学・経済学会	23(―)
日本獣医畜産大・畜産学科	79(13)
都立立川短大・家政学科，食物学科	118(26)
文京女子短大・英語英文学科	239(11)
文京女子短大・英語英文学科	242(9)
東京学芸大・化学教室	47(5)
東京学芸大・理科教育学教室	18(2)
東京学芸大・物理学教室	44(4)
東京学芸大・生物学教室	56(5)
東京都立商科短大・経営学科	84(15)
東京都立大・物理学科	44(6)
日本女子大・家政経済学科	77(10)
職業訓練大学校	281(50)
文教大学女子短大部・英文学科	*255(18)
計 39 グループ	5,216人 (451人)

（注）参加者数の（ ）内は内数で教職員。＊は2泊，他は1泊。実施順。

◆わたしたちの合宿◆

国際関係学科のフレッシュマン・キャンプ

――広領域学科の理解を深める機会――

津田塾大学教授　百瀬　宏

津田塾大学の国際関係学科では、このところ毎年、フレッシュマン・キャンプでセミナー・ハウスのご厄介になっている。われわれの大学は学芸学部が一つあるきりで、そこに英文学科、数学科と並んでこの学科が設けられているわけであるが、この小じんまりとした大学の看板は、ゼミナールをつうじての少人数教育の徹底である。それだけに、セミナー・ハウスを利用しての新入学生にたいするガイダンスは、学生にとっても教師にとっても貴重な意味をもっている。しかし、われわれの学科にとって、フレッシュマン・キャンプがもつ価値は、それだけにとどまらない。専門分化の甚だしい旧来の学問のあり方にたいする反省のうえに立って発足した広領域の教学をめざす学科の性格を、いかにして新入学生に理解してもらうかという問題をわれわれは抱えているからである。

われわれのフレッシュマン・キャンプは、自由参加をたてまえとしてきたが、今年もほとんどの新入学生・教師が参加した。従来は5月に行うことが多かったが、全国各地から学園にやってきた新入学生たちの日常生活がひとつ落ち着いてきた頃、という利点はあるものの、やや気抜けした感がないでもなかった。その点、4月26・27日という入学直後の時点を狙った今年の企画は、学生たちに新鮮な印象を与えたのではないかと思う。そのゆえか、学生たちの反応は例年になく積極的であった。

一泊二日という短い時間を最大限に活用して到着直後に行われた一回目のパネルディスカッションでは、教師たちが、それぞれの専門分野を抱えながらこの学際的学科にかかわってきた抱負と問題点を率直に語り、翌日はそれを受けたかたちで、先輩学生をまじえた討論が行われた。新入学生の発言内容は千差万別でとてもここに要約しきれるものではないが、そのどれもが〝たてまえ〟を語るよりはそれぞれの個性に発した興味深いものであり、なかには教師も思わず身構えてしまうほどの鋭い質問が出たのは収穫であった。これも、自然に囲まれたひろびろとした環境のもとで、学生も教師も日常の教室を離れて意見をぶつけあうことができた結果であろう。

先生方が次つぎと自己紹介（講堂）

ゼミ別にフレッシュマンの記念撮影（出会いの丘）

東京学芸大学幼稚園教育学科オリエンテーション
東京都立大学機械工学科新入生オリエンテーション
早稲田大学教授　浦田　賢治
東京農工大学農業工学科新入生合宿オリエンテーション
慶応義塾大学留学生オリエンテーション・キャンプ
慶応義塾大学助教授　笠井　昭次
中央大学教授　高柳　先男
中央大学哲学科教育学専攻新入生オリエンテーション合宿
法政大学教授　五味　健吉
工学院大学溶接塑性加工研究室
工学院大学助教授　須田精二郎
津田塾大学国際関係学科フレッシュマン・キャンプ
日本女子大学社会福祉学科新入生オリエンテーション
立教大学講師　小林　晃
明治学院大学グリークラブ
学習院大学学生相談所フレッシュマン・キャンプ
東京医科歯科大学歯学部付属歯科衛生士学校新入生研修ゼミナール
明治大学短大講師　篠原　敏彦
都留文科大学教授　大島　真
都留文科大学助教授　三井須美子
横浜市立大学教授　柳下　勇
東京純心女子短期大学新入生オリエンテーション
東京コンピュータ専門学校新入生オリエンテーション＊
神奈川大学助教授　深澤　俊昭
神奈川大学助教授　堀野　定雄
東邦大学生理学研究室
専修大学教授　麻島　昭一
数学若手の会新人セミナー
建築設備耐久性研究会
すみれ幼稚園
歴史教育者協議会
小さないのちを守る会
国立西埼玉中央病院附属看護学校
YFU日本協会＊
高橋聖書集会
国際交流サービス協会
オリンパス光学工業
光印刷
沖電気工業＊
日電アネルバ
日本電気＊
東京重機工業
アイワールド
京王百貨店
読売メディアセンター
アスター精機
小西六写真工業
興亜火災海上保険
東武トラベル
日本ドクタールノー化粧品
酒井薬品
川崎電線
久光製薬
日本電気コストコンサルティング
エムエス計算センター
日本分光工業
工業所有権研究会
アイディ
〔個人利用〕
日本販売管理協会　塚本慶五郎

新入生による記念植樹――東海大学医学部（第3群宿舎村）

5月

（98グループ、延五、四七五人）

国際基督教大学アイセックICU準備委員会
東京大学助教授　石川　経夫
中央大学教授　川辺　康男
青山学院大学教授　原　豊
青山学院大学青山キリスト教学生会
東京経済大学ゼミナール連合会
東京電機大学SF研究会
中央大学教授　土方　直史
日本女子大学小林グループ
日本大学教授　北野　弘久
東京経済大学教授　田中　章義
早稲田大学日常英語研究会
中央大学考古学研究会
法政大学会計学研究会
学習院大学教授　斉藤　孝
芝浦工業大学電子計算機研究会
駒沢大学創法会
立教大学助教授　疋田　康行
東京都立商科短期大学商学科新入生オリエンテーション
東京電機大学教授　八木澤壮一
東京都立大学教授　馬場　宣良
津田塾大学英文学科フレッシュマン・キャンプ
東京都立大学教授　坂元　忠芳
慶応義塾大学助教授　森　康彦
中央大学経済学会新入生歓迎合宿
青山学院大学青山子ども会
国際基督教大学教授　都留　春夫
駒沢大学教授　大久保治男
東京都立商科短期大学商学科Ⅱ部新入生オリエンテーション
東京工業大学教授　伊賀　健一
東京電機大学電子工学科新入生オリエンテーション
慶応義塾大学教授　村井　実
立教大学教授　三戸　公
東京都立立川短期大学新入生歓迎セミナー
文京女子短期大学英語英文学科新入生オリエンテーション＊

中央大学助教授　関口　定一
芝浦工業大学教授　高橋　清
東京学芸大学化学教室新入生合宿研修
東京学芸大学理科教育学教室新入生合宿研修
東京学芸大学物理学教室新入生合宿研修
東京学芸大学生物学教室新入生合宿研修
東京都立大学助教授　島田　良一
上智大学アムネスティー・グループ
東京都立商科短期大学経営学科新入生オリエンテーション
駒沢大学教授　石井　啓雄
中央大学教授　高窪　利一
東京都立大学物理学科新入生オリエンテーション
日本女子大学家政経済学科新入生オリエンテーション
東京理科大学教授　狩野　紀昭
早稲田大学教授　佐藤　慶幸
駒沢大学助教授　谷敷　正光
杉野女子大学一般教育研究会
東京学芸大学助教授　筒井　文隆
学習院大シェイクスピア劇研究会
日本大学芸術学部朗読研究会
専修大学教授　竹林　代嘉
東洋大学教授　松本　恒之
玉川大学文学部（教育・芸術）2年次学年研修
日本獣医畜産大学畜産学科新入学生オリエンテーション
桜美林大学体育文化団体連合会
文教大学女子短期大学部英文学科フレッシュメン・セミナー
十文字学園女子短期大学家政専攻交歓会
職業訓練大学校新入生合宿
阿佐ヶ谷美術専門学校
神奈川県立旭高校リーダー研修会
第132回大学共同セミナー
建築設備耐久性研究会
FWCC準備委員会
第一弘報社

予告

開館20周年記念行事のご案内

▼第133回大学共同セミナー

主題　情報化と社会

期日　10月25～27日（金～日）

＜全体講義＞問題提起　東京大学教授　竹内啓氏

＜シンポジウム＞

Ⅰ　生物界における情報伝達

a 社会性昆虫の世界（松本忠夫氏）／b 霊長類の行動（長谷川真理子氏）／司会（尾本恵市氏）

Ⅱ　人間と情報

a 生命と情報（清水博氏）／b 言葉、身振り、文字（無藤隆氏）／c カミと妖怪と人の間（宮田登氏）／司会（岡宏子氏）

Ⅲ　情報化と社会・経済

a 情報化で経済社会はどう変わるか（今井賢一氏）／b 情報化の進展と生活意識の変化（井関利明氏）／c 情報化と生活（竹内啓氏）／司会（小浪充氏）

＜イヴニング・レクチュア＞

NHK「ザ・デイ」担当記者　若林誠一氏

■募集人員　約一〇〇名
■参加経費　一一、〇〇〇円
■締切日　10月12日

＊

《記念シンポジウム》—ご招待—

主題　情報化と社会

日時　10月26日（土）午後一～三時

＜発題＞情報と生物社会（木村武二氏）／日本の国際的言語対応を考える（鈴木孝夫氏）／サービス、情報と時間（榊原胖夫氏）／司会（竹内啓氏）

▼特別記念・公開講演会

主題　情報化と社会

日時　10月30日（水）午後五時

場所　築地・朝日新聞社ホール

＜講演＞

Ⅰ　技術革新の現在と経済社会の二面　京都大学教授　伊東光晴氏

Ⅱ　情報化と人間生活　東京大学教授　竹内　啓氏

■聴講無料

■お問い合せは　企画室（☎0426-76-8532）

◎第4回大学院共同セミナーの講義と演習が出版物に

書名＝ヘブライズムとヘレニズム
—合理性と非合理性をめぐって—
著者＝並木浩一・川島重成・絹川正吉・川田殖・荒井献
'85年5月30日発行・新地書房刊

（目　次）

序文　……中川秀恭

Ⅰ　イスラエルにおける神・人間・社会—ヘブライズムにおける合理性と非合理性—　……並木浩一

Ⅱ　ギリシア文学における人間と人間を超えるもの—ダイモーンの顕現をめぐって—　……川島重成

Ⅲ　ギリシア思想における数学　……絹川正吉

Ⅳ　ギリシア哲学における合理性と実証性　……川田　殖

Ⅴ　初期キリスト教における「正統」と「異端」……荒井　献

あとがき　……並木浩一

（序文から）

今回のセミナーは、これまでわれわれ日本人にとって、しばしば近代合理主義文明の代名詞のように見做されていた西洋文明というものの淵源に立ち返り、ギリシア文学・哲学・数学、旧約聖書学、新約聖書学とグノーシス研究の各専門領域の方法を踏まえながら、能うかぎり学際的視野に立って、ヘブライズムとヘレニズムの両思潮の本質を、特に合理性と非合理性の問題に焦点をあてつつ解明しようということを、目標にかかげた。このような企画の根底には、合理性と非合理性とは互いに排除し合うものではなくて、むしろ史上に現われた如何なる文明・文化にも、あるいはそれを支えた宗教的・文学的・学問的思考にも、一義的に定義することのできない合理性と非合理性とが互いに緊張しながらはたらいており、それぞれの時代における文明・文化はその精神的状況に応じてとらえられた非合理的なるものの合理化——ロゴス化——の結果として生まれ出たものではないか、との問いがあった。

▼お求め方法

二、二〇〇円（定価）を二、〇〇〇円でお頒けします。ご希望の方はフロントまで。

郵送の場合は送料共二、二〇〇円で。　問い合せ先・企画室

酒井薬品＊
関東共立エコー
日本生産性本部＊
協和発酵労働組合＊
そごう
京王百貨店
アイワールド＊
日本電気コストコンサルティング
小西六写真工業＊＊＊
雪印物産
多摩中央信用金庫
興亜火災海上保険
阿部興業
〔個人利用〕
トラベノール　矢部　廣重
国際交流基金　尾子　隼人
中央大学教授　三橋　文明
安田精工　安田　用治
多摩美術大学教授　堀　友三郎
相模女子大学教授　小川　秀子
東洋大学教授　堀　光男
ティージー不動産　米山　哲夫

●編集後記

第132回大学共同セミナー「日本文化の深層」は、息の合った講師陣と、周到な手順で組み合わされた四つのシンポジウムを中心に展開されました。参加学生の感想文三篇は、共通に、大学の「受けさせられる」、「半ば強制的に聴かされる」講義のあり方を問うています。伊藤敦生君の「講義が教授と学生との協力によって創られることを改めて感じた」ということばに、編集子は20年を経た大学セミナー・ハウスの生命（いのち）を感じました。

四月に発足した新しい事務組織に伴い、「事業部だより」を本号から「業務通信」と改題しました。（能）